

「社会生活の病理学」と「パリ生活場景」の主題

—「パリ生活場景」論 (1)

西 川 祐 子

(一) 「金色の眼の娘」第一章「パリの相貌」

「オランダ派画家」(「私生活場景」第一版のまえがき)のくすんだ色調と、精密な筆致で、いろいろな家庭と家族の風俗、純真な青年の人生における最初の冒険を描いたのが「私生活場景」だった。そこから「パリ生活場景」へ移ると、うってかわって色彩の過剰、あらゆる誇張、畸型の渦巻く光景が展開される。

「パリ生活場景」巻頭の作品が超現実的な秘密結社の登場する「十三人組物語」であることが、この印象をつよめる。なかでも、ドラクロワにささげられている第三話「金色の眼の娘」は、異国趣味をとり入れた強烈な色彩にいミどられ、過度にロマネスクな物語である。バルザックは、あらかじめ、この小説の第一章に「パリの相貌」という長いプロローグをおいて、物語中に描かれる異常性こそ、パリという都会の現実であることを証明しておこうとした。

作者はパリ全市を見わたすことからはじめる。種々雑多なイメージが手あたり次第というほどに投げこまれる。パリは広大な畑であり、享楽の大工場であり、檻であり、豪華な蒸気船である。なかでも燃えあがり、煮えたつ地獄という比喩がくりかえされる。

パリの住民は職業と、居住地域と、生活原理により、五つの階級に分けられる。それが地獄の各層にあたる。①労働者②プチ・ブルジョア③ブルジョア④芸術家⑤貴族。

各階級は、それぞれに特有な、なにか極端なものをかせられ、その重荷に苦しんでいる。「下層階級のとはうもない労働、大小のブルジョアジーをおしつぶす頹廃した利害関係、芸術家の冷酷な思想、上流階級がたえまなく追求する過度の快楽、これらがパリの顔の平生の醜悪さを説明する。」^{註1}

上流階級のかかっている倦怠の病気が、「金色の眼の娘」の猟奇的冒険の裏側をなしているのである。

しかし、病んでいるのは、上流階級だけではない。地獄の各層を描写してゆく文章は、次のような単語の羅列である。

se déformer

se gauchir, se grossir, maigrir, pâlir,

brune de peau, noire de tapes, blême d'ivresse,

torsion physique, crétinisé,

la face usée, plate, vieille, sans lueur aux yeux,

sans fermé dans la jambe, air hébété,

destruction physique et morale,

s'user et démoraliser,

ne conserver pas le sens droit,

s'arrondir, s'aplanir, se rougir,

pâleur aigre, colorations fausses,

les yeux ternis et cernés,

symptômes de l'abâtissement de la pensée,

brisé, fatigué, sinueux,

impuissance,

すべての階級が、歪み、傷つき、病んでいるのだ。

「金色の眼の娘」序章は、「十三人組物語」が「パリ生活場景」の最初の作品となることが決まったときに書かれた。従って、場景全体のプロローグも、かねていたのである。「パリ生活場景」の主題は、この地獄の五つの層をめぐる歩いて、住民達の病状をくまなく描きあげることであった。

そこで「社会生活の病理学」(「分析研究」という、バルザック

のもう一つの本の題名が思いおこされても不思議はない。事実、「社会生活の病理学」の断片といわれる二つのエッセー、「優雅な生活論」と「歩き方の理論」は、「金色の眼の娘」第一章ときわめて類似した内容をもっている。

「私生活場景」の背後に「結婚の生理学」があったように、「パリ生活場景」に対しては「社会生活の病理学」があると仮定できないだろうか。

註1 La Fille aux Yeux d'Or (Classiques Garnier)——以後
F. Y. O. 2略す—p. 386

(二) 仮空の本「社会生活の病理学」

「社会生活の病理学」の構想は、早くからあったらしい。バルザック自身は一八二〇年から、といっている。しかし、記録に残っているものの中で、この題名がはじめて現われるのは、「結婚の生理学」(一八二九年)出版の数カ月後と認められている。

一八三〇年、春から秋にかけて「優雅な生活論」を執筆。原稿の「優雅な生活論」の題名の上に、さらに「社会病理学、または住居、食物、歩き方、馬医術、言葉や行動、あるいは沈黙、など……」によって社会状態が提示するあらゆる形式の下にとらえられた思想の表現についての数学的、物理的、化学的、先験的考察——『結婚の生理学』の著者による』と書きこみがある。

一八三〇年八月、「結婚の生理学」を認めたラチエに「優雅な生活論」の原稿を送り、批評を乞う。バルザックには一冊の本として充分の内容という自信があった。^{註2}

一八三〇年十月、十一月、「優雅な生活論」を発表（La Mode）。
一八三三年八月、九月、「歩き方の理論」を発表（Europe Lite-
raire）。

一八三四年四月、「金色の眼の娘」第一章「パリの相貌」を、「十九世紀風俗研究」の「パリ生活場景」として出版。

一八三四年六月、「結婚の生理学」第二版印刷。第一版にはなかった「社会生活の病理学」の予告がつけ加えられた。

一八三八年十月、シャルパンチエ書店より「結婚の生理学」とフリ
ア・サヴァランの「味覚の生理学」を抱き合わせた版の出版。
バルザックは付録として「近代刺戟物論」を加えた。その上に、
長い巻頭註をつけて、「近代刺戟物論」と「優雅な生活論」、「歩
き方の理論」を含む「社会病理学」の予告をする。

一八三八年十二月、シャルパンチエに対して「社会病理学」を売る
契約を結ぶ。

一八四二年の「人間喜劇」序文にも、「社会病理学」の題名は「分析
研究」の中にあげられている。

バルザックは、手紙や作品予告の中で、「社会生活の病理学」目
下進行中、目下印刷中、年末発行決定、とくりかえしたが、実際
は、断片だけのこって、全体は書かれずに終わった。

それにもかかわらず、バルザックの頭の中には、この本は、すで
に完成したかのような幻があった。

「私の大作品『社会生活の病理学』」

「人間喜劇」には欠かすことの出来ない作品として、全集の計画
のたびに題名が挙げられている。「人間喜劇」におけるこの作品の

位置については、「近代刺戟物論」の巻頭註の中に、最も詳しく説
明されている。

「一八二〇年以来、私は社会生活を深く分析し、そのすべてを四
冊の政治道徳的、科学的觀察にもとづいた。しかもふざけた調子の
批評の本にまごめたいという意図をもっていた。」

すなわち、「教授団の分析」、「結婚の生理学」、「社会生活の病理
学」、「美德の特殊研究」、この四冊が「人間喜劇」の「分析研究」
を形づくるはずであった。

「風俗研究」の各場景は、人間の一生の比喻を用いて説明された。
「私生活場景」は青春、「地方生活場景」と「パリ生活場景」が成年
であった。「分析研究」も同じやり方で説明されている。「教授団の
分析」は「誕生から二十五才までの、人間がつくられる（傍点は原
文ではイタリック）時代におけるあらゆる影響の哲学的研究」であ
る。人間は平均二十五才で結婚するから、第二の本は「結婚の生理
学」である。第三の「社会生活の病理学」の段階では、人間はすで
に社会によって作りあげられ、あらかじめ与えられた法則に従って
すべての行動を行なうようになっていく。そこで、この本は社会的
人間が外部生活にどのように表現されているかを調べ、法典化する。
最後の「美德の特殊研究」で社会意識の法則をうちたてて終
る。この四冊のうち「結婚の生理学」だけが実現した。

私達には、「社会生活の病理学」の断片として、この解説と、三
つのエッセー「優雅な生活論」（一八三〇）、「歩き方の理論」（一八
三三）、「近代刺戟物論」（一八三八）だけが残されている。気まぐ
れのようにさえ見える、ばらばらな題名のもとに、時間もかなりお

いて発表されたこれらの文章は、はたして共通する理論を展開しているだろうか。

註 1 Guyon: La pensée Politique et Sociale de Balzac p.

432

- 2 Correspondances (Classiques Garnier) tome I, p.462
- 3 Œuvres Complètes de Balzac (Conard) XXXII p.317
- 4 Œuvres Complètes (Conard), Œuvre Diverses—
後 O. D. へ略す—tome III, p. 769
- 5 Œuvres Complètes (Conard), tome I,
- 6 Correspondances tome III, p.475
- 7 O. D. III, p. 769.
- 8 同右

(1) 「優雅な生活論」(Traité de la Vie Élégante)

前年の「結婚の生理学」(一八二九年)の成功の記憶がまだ新しいときに書かれたこのエッセーは、同じ方法を用いている。「結婚の生理学」には「夫婦の統計」という章があった。そこでは、まず全女性人口を、百姓女、労働者階級の女、商人階級の女、というように分類し、最後に、完全な有閑生活を享受することのできる「淑女」(femme honnête)とよばれる少数の特権階級を残した。このきらびやかな集団を文化の集積の象徴とみなし、彼女達の間ひらがっている「姦通」という風俗に注目した。この特殊な風俗の分析から、逆に結婚制度一般を考えようとしたのである。

「優雅な生活論」も分類ではじまる。階級論は、「結婚の生理学」

より具体的にぐわしい。何故なら、階級はどちらにおいても主に職業を基準として分けられたが、「生理学」の分類は女性だけが対象であり、彼女達は家庭を通じて、二次的に、階級と結びついていたからである。

バルザックは、最初に全体を大きく三つに分ける。

I L'homme qui travaille—La vie occupée

II L'homme qui pense—La vie d'artiste

III L'homme qui ne fait rien—La vie élégante

註 1

travailleur et oisif の対立、芸術家の独自性、といった図式は、当時のサン・シモン主義者のものであった。バルザックは、I をさらに三つに分ける。

①労働者、石工、兵士など。

「これらの人々は、十の指を動かしながら全生命を譲りわたしてしまうのである。(…)労働によって組織に組みこまれている人々は、蒸気機関にも似て、まったく同一の形態をとって生まれ、个性的なところを、いささかも持ち合わせていない。生産具としての人間(L'homme instrument)は、一種の社会的零であって、いくら加えたところで、零のまゝに何か数字がくるのでないかぎり、決して一つの量にならない。」^{註 2}

②小売商人、下士官、代書人など。

「構造が少し複雑になっただけ(…)。彼らは小数だろう。」^{註 3}

③医者、司祭、弁護士、公証人、下位法官、卸業者、官吏、将官など。

「これらの人々は見事に調整された機械である。そのポンプ、チ

エー、サドル、すべての歯車は、ていねいにみがかれ、調整され、油をさされて、相当りっぱに見える刺繍をほどこされたおおいの下で回転している。しかし、この生活は相変らず機械じかけの生活であって、そこではまだ思考が自由ではないし、豊かでもない。(…) 彼らは社会的総額において、整数に数えられるとしても1にすぎない。^④

余暇のない生活(La vie occupée)は、③までで終るが、その上に社会生活の価値規準を倒錯して生きることのできる芸術家がいる。

④芸術家

「芸術家は例外である。彼の無為は一種の労働であり、労働が一種の休息だから。」^⑤

⑤最後が、高級官吏、高位聖職者、將軍、大土地所有者、大臣、貴族といった優雅な生活を送る有閑者である。

「金色の眼の娘」冒頭(「パリの相貌」)にあった都会生活者の五分類の原型がここにある。

パリの住民を階級別、あるいはもっと細かく階層に分けて、その風俗をあるいは諷刺的に描写するといのは、すでに伝統となっていた。メルシエは十八世紀に大部な「パリ絵図」(Mercier: Tableau de Paris, 1781)を書いた。そのまえがきには、「私は、市民のあらゆる階級の中を探究した。対照関係により、この巨大都市の精神的相貌をよりよく明らかにするため、誇り高い豪奢からは最も遠くへだたった事物をも無視しなかった。」とある。

バルザックは「食料品屋」、「銀行家」、「公証人」、……といった題の雑文を数多く書き、ジャーナリズムに受入れられていた。しか

し、「優雅な生活論」には、モノグラフィイに入るまえに、階級分類の全体を支配する原理をみつけないという努力がなされている。そこから次のアフォリズムが生まれた。

「I 文明生活にしろ、野蛮生活にしろ、その目的は休息(repos)である。II 絶対的休息は憂鬱を生む。III 優雅な生活とは、おおまかにいえば休息を刺戟する術のことだ。IV 労働になれている人は優雅な生活を理解することが出来ない。」^⑥

アフォリズムⅢが、「金色の眼の娘」の下・マルセーの異常な冒険を説明する。

さきの五つの階級は、彼らの持っている「休息」の量により段階差を生じる。①の労働者階級は「休息」をうばわれ、⑤の特権階級には労働がなくて、絶対的休息のみがある。「優雅」とは、「休息」の集積を象徴するものである。そこでバルザックは、労働者にとって「優雅」とは、檻樓の入った檻を意味し、プチ・ブルジョアにとっては舟型ベッドとか夜の明り、ブルジョアにとっては従僕を意味すると説明している。一番上の特権階級の生活だけは、生活の全部が「休息」であり、従って、優雅そのものとなる。ここに「優雅な生活」という特殊な風俗が生まれるのである。

社会を travailleur と oisif の分離としてとらえるのは、サン・シモン主義者の図式である。ドナールは、「金色の眼の娘」の階級論、とりわけ労働者の悲惨な現状をのべた部分には、バルザックと親父のあったサン・シモン主義者ビュッシュの「歴史科学入門」(Buche: Introduction à la Science de l'Histoire, 1833)の影響があると指摘している。^⑦この本には、労働者階級が、幼年時

らの激しい労働と、疲労をまぎらわすための飲酒の習慣によって肉
体の畸型化 (atrophie) をひきおこしていると読者に訴えている
部分がある (二六―二七頁)。ビュッシェは「最大多数を占める貧
しい人々のために」というサン・シモン主義の立場から、この本を
書いた。

「優雅な生活論」にも

「サン・シモン主義学説によれば、優雅な生活は、社会のかかる
もっとも重い病氣だ。」とある。しかし、それに並んで、

「P・T・スミスによれば、優雅な生活は、産業拡大の原因。」と
いう引用もある。

バルザック自身は、一方ではサン・シモン主義の図式を借りなが
ら、他方では、一種のエネルギー論の観点から見る。特権階級に集
中された「休息」は、全国民の労働の産物である。バルザックにと
っては「優雅な生活」は、「社会組織の最も厳密な演繹に基^{註10}づく」
のであり、「一国の進歩のしるし」であるから興味をひくのである。
「社会の進歩を完全に理解することだけが、優雅な生活の感覚をも
生む。この生活態度は、すでに成年に達した若々しい組織によって
つくりだされた新しい利益と欲求の表現ではないか。」^{註12}

「優雅な生活」の歴史は一七八九年以前にはさかのぼらない。何
故なら、旧制度下では、封建貴族の階位制、その紋章などが、その
人間の自由にしうる人間、労力、暇などの量をはっきりと示してい
るからである。大革命は生まれによる貴族制を廃したかわりに、金
と権力と才能による新しい貴族制をうちたてた。新しい貴族も、自
己の権力の段階を誇示したいという激しい欲望にとらわれる。旧い

階位制は、すでに無力なので、彼らはただ、立居ふるまいとか、教
育の成果である「何かしら」のニュアンスの相違だけで自らを区別
させなければならない。

そこで人々は生活の外観を重んじ、流行を追う。何故なら、現代
では、階位を授けるのは、世論の力であり、流行は、衣裳^{モード}の形をと
った世論に他ならないからと説明されている。

「優雅な生活論」第三部は、「優雅な生活」を表現する服装、話し
方、歩き方、住居、家具などについての具体的研究に入る。「結婚
の生理学」において姦通防止法が、ふざけた調子でひろうされた
と同じく、優雅な生活者としてふるまうための技術がのべられるわけ
である。バルザックの観点は、次のアフォリズムに要約される。

「化粧は社会の表現である。」^{註13}

註1 O. D. tome II, p. 153

2 同右

3 同右

4 O. D. tome II, p. 154

5 O. D. tome II, p. 155

6 同右

7 L'Année Balzacienne 1961, p. 143-144

8 O. D. tome II, p. 156

9 同右

10 O. D. tome II, p. 162

11 同右

12 O. D. tome II, p. 158-9

(2) 「歩き方の理論」(La Théorie de la Démarche)

ここでは、バルザックは、もっぱら人間の歩き方に注目し、街角で観察した結果、人の数と同じだけの歩き方があることを発見する。このエッセーでは、社会生活をおくる人間は、歩き方により判断されるという理論を裏づけるものとして、「ルイ・ランベール」にあったバルザックのいわゆる精神物力論(dynamisme spirituel)が述べられている。

バルザックによれば、生命は流体であって、各人は、その一定量を保有する。

「人間は、彼の行動から生じるすべての行為により、彼の活動局面に何らかの効果を生じさせる、力のある量を生じさせる。」^{註1}

「行動の中には、人間の最も純粋な行為である思考(Pensée)を含む。言葉は、思考の翻訳されたものである。そして、歩き方と身ぶりは、言葉を多少かれ少かれ情熱的に実現したものである。」^{註2}

「すべて法外な行動は、崇高な浪費である。」^{註3}

「精神は、遠心力で得たものを求心力で失う。」^{註4}

美しい動作とは無駄のもっとも節約された動作である。考えることのない動物はすべて高貴な歩き方をする。それに反して、人間は、だれ一人として完全な歩き方ができるものはいない。思考がつねに人間を濫用へとかりたててからである。

「身体のであれ、精神のであれ、濫用は、社会の永遠の傷であり、身体的特徴、または偏りを^{註5}つくる。」

歩き方に表われるのが、この偏りである。

「強制労働により、ある動作をくりかえさねばならない人は、歩き方に、強度に決定的な、まるで機関車のような原理をもっている。」^{註6}常に王座についている王は、運動不足からよちよち歩きになる。一日の長時間を暗い部屋ですごす法官や官吏は、身体的にも精神的にも機械じかけのようになる。門番や堂守は痴呆の一手手前である。

「金色の眼の娘」の冒頭にあった各階級の人間の、それぞれの畸型化の原理がここにある。

結論の部分には、ルソーの「考える人間は、墮落した動物である。」という言葉がひかれる。しかし、その後では、バルザックは次のような疑問を投げかける。

「人間の偉大な業績の中で物質的、あるいは精神的な、何か過度な行動なしに、かくとくされたものを一つでも見つけて下さることができますか。」^{註7}

註1 O. D. tome II, p. 620

2 同右 p. 620-1

3 同右 p. 637

4 同右 p. 629

5 同右 p. 640

6 同右 p. 635

7 同右 p. 642

(3) 「現代刺戟物論」(Traité des Excitants Modernes)

刺戟物論というのは、「過度」なものへ走りやすい傾向をもつ現

代、社会をもっとも端的にとらえる秀れた視点である。バルザックは、刺戟物として、酒、砂糖、紅茶、コーヒー、煙草の五種を挙げている。「現代」とわざわざことわってあるように、このエッセーの書かれる数年まえから、これらの刺戟物は異常に発達した。バルザックは刺戟物の大量摂取の習慣によって社会が変型をきたしているという印象をもったのである。

刺戟物流行の原因の一つは、工業の発達にきせられている。砂糖が、ようやく数年前から大衆に買えるようになった時代であった。しかし、もう一つの原因は社会生活そのものと指摘される。

「『過度(exces)』とは、自然がきめた正常な法則をこえて、ある快楽をくり返そうとすることに基づく。人間の力が忙殺されることが少いと、それだけ『過度』に走りやすい。思考が、抗いようもなく、人を押しやるからである。」^{註1}

「社会は、文明化され、平穩であればあるだけ、『過度』への道をたどることになる。」^{註2}

「『自然』は、すべての器官が等しい割合で生命活動に参加することを望む。それに反して『社会』は、人間のうちに、いずれかの特定の快楽にたいする一種の渇きを育てる。」^{註3}

社会の各階級には、個々の刺戟物がある。バルザックは、ぶどう酒とコーヒーの効果については、自分の体験をまぜて、特にくわしく述べている。酒の酔は、現実世界に幻想のヴェールをかけて痛みや苦しみを消す。バルザックは、十数本のぶどう酒を飲んでから劇場へ出かけた体験を語っている。そこには、羽かざりやレースや、美女達がおしよせてくる幻想のいかにもいきいきした描写がある。

しかし、ぶどう酒は、本質的には下層階級の刺戟物であって、労働者は、一週間の労働を終えて給料を手にとると、休日は酒場に入りびたりになって、労働で歪んだ肉体を、さらに放蕩でねじ曲げる。下層労働者と飲酒の問題は当時の社会問題であった。「金色の眼の娘」では、バーが毎週、労働者による革命の爆発をくいとめる、という表現がなされている。

一方、コーヒーは、特権階級の、そして知的な仕事をする人間のための刺戟物である。頭脳の機能の働く時間をのばすからである。ロッシニ、その他コーヒーを愛用する芸術家の例が上っている。そのうえ伝説となっているバルザック自身のコーヒーの入れ方が、異様なほどの熱情をこめて説明されている。コーヒーの種類、挽き方、量、水の温度、煮る時間などを一週間ごとにかえて次第に濃度をたかめてゆく。最後には、絶食の後、最高の濃度に煮出したものを最も多量に飲む。それから極端な衰弱が訪れる。この過程において、味や香りについては一語も述べられない。快楽ではなくて苦役の記録である。ただ消耗してゆくためだけに、かりたてられている人々を観察し、分析しているバルザック自身が、その最も残酷な衝動にとりつかれているのである。誰も逃れることが出来ない。

「今日では、すべての階級に酔おうとする傾向がみられる。」^{註4}

刺戟物によって絶えず刺戟され養分をおくられる特定の器官は、肥大し、ついには傷む。一方、その器官がとりこむだけ、他の器官は養分が不足して衰弱する。一般に刺戟物を使用すると、渇き、発汗、唾液の分泌停止、生殖能力の喪失といった症状が生じる。「過度」の結果として損われるのは個体だけではなく、世代の全体であ

る、というのが結論である。

ブリア・サヴァランの「味覚の生理学」とバルザックの「結婚の生理学」の合本の付録として書かれた「現代刺戟物論」は、まづがきによれば、「味覚の生理学」を補うことを目的としていた。

ブリア・サヴァランの本にも酒、砂糖、コーヒーといった項があつて、その歴史、飲み方、効果が説明されている。しかしこの本は、美食家が快楽と衛生のために書いた幸福な本である。それに対して、バルザックの興味は、もっぱら人間の能力を一時的に拡大する刺戟物としての効果と、過度の刺戟を求めずにはいられない衝動の方に向けられている。^{註5}

註1 O. D. tome III, p. 180

2 同右

3 同右

4 O. D. tome III, p. 192

5 ボードレールの「個性増加の手段としてのぶどう酒とアン・シーシュの比較」(一八五一年)は、バルザックの「現代刺戟物論」と非常に似通った内容をもっている。ボードレールはブリア・サヴァランを罵倒することからはじめる。階級に特有の刺戟物があることも指摘される。下層階級はぶどう酒、特権階級はコーヒーに代つてアン・シーシュである。ボードレールのエッセーには、「近代刺戟物論」の名は見当たらないが、アン・シーシュの効果を語るところに「一時間のうちに何人分もの人生を生きてしまう。これこそまさに、『あら皮』の主題だ。」とある。バルザックもボードレールも精神を昂揚させ

る物質に対する熱狂的な嗜好の中に「現代性」を説明するものがあると感じている点で共通している。^{モデルニテ}

(三) 「社会生活の病理学」と「パリ生活場景」

三つのエッセーに共通するのは、社会生活状態の探究という主題である。自然状態が調和であるのに対して、社会状態とは、不均衡の激化としてとらえられている。片方に集中があるとき、他方には、必ず不足が生じる。集中の行きつくところには過剰があり、過剰は常に極度の不足と隣り合っている。

「優雅な生活論」では、「休息」が下層階級からは奪われて、次第に上層へ集中されていった。その結果、特権階級は休息の過剰のために病み、下層階級は労働の過重にひしがれる。このように、社会生活を送る人間は、いずれかの過剰のために精神と肉体にひずみを生じるといのが「歩き方の理論」であった。そればかりか、社会全体が、過剰と不均衡をうながす速度をさらに狂的に早めようとして刺戟物に熱中する姿が「近代刺戟物論」に描かれた。

「すべての器官は、濫用でも、使用不足でも損われる。」(「歩き方の理論」^{註1})という個体の病理学に関する定式を、類推法によって、全体に適用するのが「社会生活の病理学」である。

社会生活状態が、不均衡の激化だとすれば、社会生活状態を観察するのには都市がもっとも適している。都市は、あらゆる過度な現象、富の過剰も、貧困の過剰も、すべてが集中する場だからである。バルザックが「社会生活の病理学」において観察した対象もダンディの優雅な生活、各種の職業に特有の顔がみわけられる街の雑

踏、刺戟物に酔う人々など、すべてパリという大都會の風俗であった。

「私生活場景」は、「結婚の生理学」が、ほとんど完成してから書きはじめられ、最初の短篇小説は、「生理学」のアフォリスムの各々の敷衍とさえ呼ばれた。「社会生活の病理学」と「パリ生活場景」との間には「金色の眼の娘」序章をのぞいては、そのような緊密な関係はない。しかし、「パリ生活場景」が生まれるまでに、「社会生活の病理学」の計画にうかがわれるような、全体を支配する論理をつかもうとする努力があったことは、うたがえない。

「優雅な生活論」では、下層階級からとりあげられて特権階級へむけて集中されてゆくものを、「休息」(repos)という抽象名詞で呼んだ。「金色の眼の娘」では、「休息」は、「黄金」(or)という物質名詞に代わる。

「金は地下室の採光窓の奥から溝を流れはじめ、小売店の店の奥で貧弱な堰にちよつとひつかかり、勘定台や、黄金の温床ともいふべき商社の中で延棒にかえられ、持参金とか、遺産の形で若い娘の手や、老人の骨ばった手にみちびかれて貴族社会にむけてはとばしり、そこから光りがやく大河となって流れ行くのである。」^{註2}

「社会生活の病理学」の断片は、アフォリスムやマクシムをつなぐ、いわゆる法典^{コード}ものの、わざと乾いた文体で書かれた。これらのエッセーを詩的表現を用いて書きなおしたのが「金色の眼の娘」の序章である。そこには視覚にうったえるイメージの濫用が行なわれている。しかし、過剰現象のひしめいている都市生活の描写には、このそうぞうしい文体がふさわしい。

「パリ生活場景」の登場人物には、しばしばレアリスムを裏切るほどの強烈な個性が与えられ、事件はあまりにもロマネスクである。これも、文明とは畸型化に他ならない、という「社会生活の病理学」の結論を表現するためのフィクションとは考えられないだろうか。

「パリ生活場景」における病める文明は、「田園生活場景」のユートピア小説において批判される。しかし、バルザックは近代文明を嫌悪の冷い目で眺めたものではなかった。バルザックは光り輝く黄金のイメージを好んだ。同様に、畸型と病患のイメージに対する偏執的な愛着も感じられる。それらは共に近代文明のエネルギーの表明だからである。「パリ生活場景」において、バルザックは、このように同時代をうけ入れ、都市に関する近代の神話の創造に熱中してゆくのである。

註1 O. D. tome II, p. 142

2 F. Y. O. p. 383